

# 『福翁自伝』を読む——日本の近代化と福澤諭吉——(その2)

2001.2.9.8

## 準備的考察

### 1. 「自然の地位」の克服

- ◆ 「フロロ」の世帯をなす語（キーワード）中のキーワード。
- ◆ 「資本主義化・近代化・文明化」出来るか出来ないかは、人々が「自然の地位」を克服出来るか否か、にかかっている。これが「フロロ」を構成する基本的視座である。
- ◆ 「自然の地位」を克服した西欧キリスト教圏は「資本主義化・近代化」の先進国になり、そのなかでも、「自然の地位」を徹底的に克服したカルバン教圏が「資本主義化・近代化・文明化」の最先端を走る諸国になった。ある程度「自然の地位」を克服しているその他の世界宗教をもつ地域（日本やトルコ等）は「半開」状態にあり、住民が「魔物の洞（アニミズム）」のなかで生きていく環境は「自然の地位」を克服せず、未開・原始・状態に止まった。
- ◆ 「自然の地位」とは何を意味するか。「自然の地位」にある人々の生き様一
- イ、「情緒的行動」…本能や感情・信念のままに生きている。
- ロ、「伝統的行動」…風俗・習慣・道徳の生き様によって生きている。
- ハ、「魔物の洞」に居かっている生き様。「魔い」によって現世の幸福を求め、「魔い」によって現世の不幸から免れようとする生き様式。
- ニ、「子から口」への「子の日暮らし」…生きていくだけの財を食いだしそれ以上働こうとせず、あとは、喜んで暮らす生活
- ホ、このような生き様からは「資本主義化・近代化」は生まれぬ。
- ◆ それでは、「自然の地位」を克服せしめる方は何か。「知識（知の力、神の力）」とくに「宗教原理」である。「宗教原理（知識）」があつて初めて「自然の地位」は克服され、「資本主義化・近代化・文明化」が始まるのである。「文明」とは「衆人の知徳の発露なり」と述べた福澤の語彙に注目しよう。

### 2. 「幼少の時」に香る福澤の近代精神

- ◆ 「フロロ」には「自然の地位」を克服したピューリタン達の様々な生活様式が描かれている。彼らが目指したのは「魔物からの解放」である。彼らは「聖業（聖あるもの）」は勿論「聖業（特に禁欲・善業）」に対してすら其に勝つものとして警戒した。かれらが警戒したものは「科挙」・特に「佛蘭西学」である。「道徳降下」のように陥りてしまった。彼らは感情や情念を「道徳動かし」かされるのを避け、冷静に合理的に行なうようになった。（カレバリー・イギリスのジェントルマン）。等々。
- ◆ 「幼少の時」を遡ると「善日」に行くのは福澤が幼少の時から身に付けていた。上記の「ピューリタン」類似の近代精神である。福澤はこうして「幼少の時」からこのような「近代精神」をも身に付けてきたのである。それは、移ろく、「洋学的宗教（前近代・経済圏）」のなかにも、「西洋的宗教圏（経済圏）」と類似する、「自然の地位」を克服する方が宿っていたからである。
- ◆ 「洋学的宗教圏（経済圏）」に準ずる力こそが「西洋文化」を容易に受け入れることを可能にしたのであると考えられるのである。「東アジア的資本主義（文明）」として。
- ◆ この観点からの「福澤の思想形成」を研究したいと思っている。

## 『自伝』に則して

### 1. 娯楽の拒否、芸能・芸術への冷淡

ピョウリタンたちは一切の娯楽を拒否した。芸術に対してもその美が罪に誘うものとして警戒した。特に、演劇に対しては厳しく批判した。(劇場打ち壊し)。福澤にも類似の精神態度が見られる。

「三味線とか何とか云うものを、聞

こうとも思わなければ何とも思わぬ。斯様なものは全体私なんぞの聞くべきものでない。娯や遊ぶべき者でない」と云う考を持って居るから、遂に芝居見物など念頭に浮んだこともない。例えば、夏になると中津に芝居がある。祭の時には七日も芝居を興行して、田舎役者が芸をするその時には、藩から布令が出る。芝居は何日の間あるが、藩士たるものは決して立寄ることは相成らぬ。住吉の社の石垣より以外に行くことならぬと云うその布令の文面は、甚だ嚴重なようであるが、唯一片の御布令だけの事であるから、藩士族は脇差を一本挟して、冠りをして賑々と芝居の矢來を破って進入る。若しそれを答めれば却て叱り飛ばすと云うから、罪がなくて答める者はない。町の者は金を払って行くに、士族は忍姿で却て威張って只進入て観る。然るに中以下部士族の多い中で、その芝居に行かぬのは凡そ私のところ一研位でしよう。決して行かない。此処から先きは行くことはならぬと云えば、一足でも行かぬ、どんな事があったとしても、私の母は女ながらも遂に口でも芝居の事を子供に云わず、兄も亦行こうと云わず、家内中一寸でも話がない。夏、暑い時の事であるから涼には行く。併しその近くで芝居をして居るからと云って見ようともしない、どんな芝居を建て居るとも噂にもしない、平気で居ると云うような家風でした。」

(P. 85 P. 9)

### 2. 「魔術からの解放」

近代ヨーロッパ人は「学問の力」と「宗教哲理の力」とによって「魔術から解放」され、「科学的・合理的精神」を身につけた。(後述)。「幼少の時」の福澤にもその萌芽が見られる。

「ソレカウ子供心に熟り思案して、兄さんの云うように殿様の名の書いてある反古を踏んで悪いと云えば、神様の名のある御札を踏んだら如何だろうと思つて、人の見ぬ処で御札を踏んで見た所が何ともない。「ウム何ともない、ヨリ、面白い、今度は之を洗手場を持って行って進もうと、一歩を進めて便所に試みて、その時は如何かあるうかと少し怖かったが、後で何ともない。「ソリヤ見たことか、兄さんが余計な、あんな事を云わんでも宜いのだ」と熟り発明したようなものだが、是れ許りは母にも云われず姉にも云われず、云えば乾と叱られるから、一人で黙々と黙って居ました。」



ソレカラ一つも二つも年を取れば自から度胸も好くなつたと見えて、年寄などの話にする神罰冥罰しんばつみやうばつなんと言ふことは大嘘だいせつだと独り自から信じ切つて、今度は一つ稲荷様を見て遣ろうと言ふ野心を起して、私の養子になつて居た叔父様の家の稲荷いなりの社の中には何が這入て居るか知らぬと明けて見たら、石が這入て居るから、その石を打擲うちなつて仕舞て代りの石を拾うて入れて置き、又隣家の下村と云う屋敷の稲荷様を明けて見れば、神体は何か木の札ふだで、之も取て棄て、仕舞い平気な顔して居ると、間もなく初午はつごまになつて、幟のぼりを立てたり大鼓たいこを叩いたり御神酒みかみさけを上げてワイ／＼して居るから、私は可笑しい。「馬鹿め、乃公のうこうの入れて置いた石に御神酒を上げて拜んでるとは面白いと、独り嬉しがって居たと云うような訳で、幼少ようせうの時から神様が怖いだの仏様が有難ありがたいだの云うことは一寸ともない。卜筮呪詛うらなまじなひ一切不信仰で、狐狸きつねが付くと云うようなことは初めから馬鹿にして少しも信じない。小供ながらも精神は誠にカラリとしたものでした。

P.22 S P.23

3. 「知性優位」の生活態度

「感情」や「情動」のままに重くのは未だ「自然の地位」にある止しがあえ  
 「感情」や「情動」を「知性」で統制する時、「自然の地位」は克服される。  
 「感情」には「幼少の手」から「知性優位」の生活態度がみられる。

或時私が何か漢書を読む中に、喜怒色に顯さずと云う一句

を読んで、その時にハット思つて大に自分で安心決定したことがある。「是れはドウモ金言だと思ひ、始終忘れぬようにして独りこの教を守り、ソコで誰が何と云て貰めて呉れても、唯表面に程よく受けて心の中には決して喜ばぬ。又何と輕蔑されても決して怒らない。どんな事があつても怒つた事はない。矧や朋輩同士で喧嘩をしたと云うことは只の一度もない。ツイゾ人と擱合つたの、打つたの、打たれたのと云うことは一寸ともない。是れは少年の時ばかりでない。少年の時分から老年の今日に至るまで、私の手は怒に乗じて人の身体に触れたことはない。……その癖私は少年の時から能く饒舌じやべり、人並よりか口数の多い程に饒舌つて、爾うして何でも為ることは甲斐々々しく遣て、決して人に負けないけれども、書生流儀の議論と云うことをしない。仮令い議論すればと云でも、ほんとうに顔を赧めて如何あつても勝たなければならぬと云う議論をしたことはない。何か議論を始めて、ひどく相手の者が躍起となつて来れば、此方はスラリと流して仕舞う。「彼の馬鹿が何を馬鹿を云て居るのだと斯う思つて、頓と深く立入ると云うことは決して遣らなかつた。」

P.26 S P.29